

『□〇ル葉桜』

緋岡 篤作 (読み：ひおかかがり) (光丘=ヒカリガオカ アナグラム)



2018年度山口県高等学校演劇発表会最優秀賞受賞

2018年度中国地区高等学校演劇大会優秀賞受賞

2018年度春季全国高等学校演劇発表会 (@豊橋) 出場

作品紹介

<共生社会の実現> 障がい者が身内にいるヤングケアラーと取り巻く人々を描いた作品。

登場人物

10人～ (少人数でやるために役を兼ねることは可能です)

上演許可はこちらにお願いします。

drama.club.at.hikari.city@gmail.com

この作品の趣旨を御理解いただいておりますら、
時代や上演団体に合わせて自由に改変いただいてもかまいません。

山口県立光丘高等学校演劇部

『□〇ル葉桜』

かくまるる はざくら

ひ おか かがり
 緋岡 篝

(光丘のアナグラム)

たにがわ あおば
 谷川 碧羽
 たにがわ さくら
 谷川 咲良

高校二年生

二十歳、碧羽の姉（障がいがあり、コミュニケーションがうまくとれない。予定変更が苦手で、漢字にこだわりがあり、好きな音や言葉を繰り返したり、聞こえた言葉をオウム返ししたりすることがある。首周辺から肩にかけて感覚過敏があり、触れられるとその痛みでパニックを起こすことがある。光るものや物の落下や回転運動に執着がある）

くすのき なな
 楠 七菜
 たかすぎ しおん
 高杉 紫音
 とがし えりか
 富樫 恵梨華
 やまね だい
 山根 大
 まつもと しろう
 松本 翔
 やなぎさわ かすみ
 柳沢 香澄
 みき ゆみこ
 三木 由美子
 はやし ようこ
 林 陽子
 きのした すいしん
 木下 酔人
 たにがわ なおこ
 谷川 直子

碧羽の友人
 碧羽の友人
 碧羽の友人
 二十代 髪を金色に染めたバイク好きの若者
 二十代 大の弟分 小さな自動車整備工場の整備士
 二十代 駅の清掃員 大の想い人
 碧羽の伯母（母の姉）
 三木の友人
 喪服と眼鏡を身につけた中年男性
 碧羽の母
 その他 通行人（中年女性・高校生（碧羽の友人）など）・警察官



地方都市、新幹線も停車する桜庭駅北口が舞台。都心ほどの人はいないが、若干の通行人が時々行き来する。舞台上には階段があり、通路を進むと駅ビル、さらに奥は改札、プラットホームへとつながる設定。舞台中央に若葉をつけた大きな桜の木、二人の少女が目かくしをして戯れる彫像がある。舞台中央から下手に続く駅ビルは改装されたばかりで、チェリーガーデンと名付けられ、大きなガラスの壁には青々とした桜の木や対面の建物が映っている。ラテバという流行りのコーヒーチェーン店やモノクロというアパレルチェーン店、エイガックスというシネコンが入り、寂れていた駅周辺が賑わいを取り戻しつつある。舞台手前、客席辺りがロータリー、下手袖手前側には公衆トイレ、さらにゲームセンター、奥側には駐輪場や駐車場が続き、上手袖にはコンビニが続く設定。舞台中央の桜の木は、柵に囲まれ、「毛虫注意」「痴漢注意！ 駅周辺で痴漢被害が発生しました。目撃情報・黒スーツ・眼鏡・三、四十代。不審者を見たら迷わず110番」と書かれた二つの看板がつけられている。中央の桜の木の前と、少し離れた下手側に二つのベンチが見える。

#1 JKたちの難題

音響1 桜色舞うころ① (by LOVERS ROCKREW WITH おはな)

舞台1 緞帳UP

照明1 開幕

下校中の碧羽が、七菜、紫音、恵梨華とともに駅に向かっていく。他の三人が楽しそうに話している中、碧羽の顔は曇りがちで、次第に友人たちから遅れていく。

碧羽 (堪えきれず、下手ベンチに鞆を投げ出し) 尾野だけは！ 尾野だけは、絶対に無理！（下手ベンチに座り込む）

友人たち、碧羽の声と鞆の音に驚いて振り返る。恵梨華、碧羽を元気づけようとふざける。

恵梨華 (歌って) Oh, No♪ (紫音に加わるように手招きする)

紫音 (面白がって) Oh, No♪

七菜 (二人に合わせて) Oh, No♪

恵梨華 Oh, No♪ 聞いちゃった？ すごくない？ (碧羽の反応が無く) Oh, No!

紫音 (面白がって恵梨華を真似て) Oh, No! Oh, No!

七菜 (碧羽の隣に腰を下ろして) なんで、うちらが尾野入れんといけんのんかね。

碧羽 全部の班に聞くべきやろ？ 山T (山本先生の愛称) !

恵梨華 (山本先生を真似て) 頼むいやあ、谷川。(例えばモーツァルトの『魔笛』に合わせて歌って) お前ら、ええ子なんじゃやけえ、尾野を入れてやってくれんかあ♪ 尾野の身にもなってみろよ♪ 憧れの修学旅行♪ どの班にも入れてもらえんとか、一人ぼっちで過ごすとか、耐えられんじやろ♪

紫音、恵梨華の歌の間に「おのおの！」と合いの手を入れ、碧羽の周辺に纏わり付く。

碧羽、うんざりして、払い除ける。

碧羽 (山本先生自身に訴えるかのように) なんで私たちなんですか？

恵梨華 (碧羽を揶揄いながら) って山Tに言えたらね。

碧羽 なんて言わんかったんじやろ。

紫音 (暢気に) うち山Tの頼み分かるよ。(碧羽の苛立ちに気づかず) うちが尾野の立場やったら耐えられんもん。(彫像の少女に話しかけ) ねえ、尾野。

七・恵 (紫音に同意して) 耐えられん。

碧羽 (友人たちの反応に) はあ？

恵梨華 (碧羽に共感を示そうと) でも、なんでうちらあなんかね？

碧羽 ほんで断つたら、うちらあが悪者になるんよ。

七菜 あ、うちらあより、尾野と同じボランティア部の人とか一緒にすればええじゃん。

碧・恵 それ、ええ！

紫音 ボランティア部七人よ。

七菜 リミット超えるんか。

恵梨華（尾野の仕草を真似て） どうするどうする！

紫音（恵梨華を指して） 尾野！

一同、「どうするどうする！ Oh, No!」とふざけあう。

碧羽 それに、あの人も、本当は尾野のこと、面倒臭いとか思っちゃよんやないん。

恵梨華 絶対思っちゃよるよね。

碧羽 楽しみにしちゃったのになあ、修学旅行。なんでこんなことになるんやろ。

恵梨華 それっちゃ……。とにかく尾野だけはねえ、なんていうか……。

紫音 落ち着かんのんよね。

一同 そう！

恵梨華 スイツチ切りたくなる。

紫音 自分で聞いて自分で答えちよるけえね。

碧羽 ほんとそれ！

恵梨華 あんな家におらんでよかったろ。

七菜 他人でよかったよね。

三人、「それな」と次々に同意する。が、碧羽、一瞬たじろぐ。

七菜（碧羽の様子に気づき） 碧羽？

碧羽（勢いよく） 思い出した！ この間、移動教室の途中で「トイレ行ってこよう」って言ったら、たまたま傍に尾野おってさあ……。

恵梨華 それ見た！（尾野の真似をする碧羽に合わせて、碧羽役を買って出て、トイレを我慢しているかのように体を捻りもじもじする）

碧羽（尾野を真似て）「焦った様子で」じゃあじゃあじゃあ、教科書持ちっちゃよっちゃやげようか？ あ、ちよつと待ってちよつと待ってちよつと待って、先に教室まで持ってちよつと待った方がええかねえ？（自分まで濡れそうならい顔になってもじもじし始め）あ、でも急いじよるよね。えつとね、えつとね、どうしたらええかね？ 一緒に入ろうか？」

恵梨華（尾野を真似た碧羽に荷物を押し付けて）「お願い。」

七・紫（悲鳴を上げ） 一緒に入ったん！？

碧羽 入っちゃよるわけないやん！（恵梨華に） 変なこと言わんでよ！

紫音 無駄に氣い遣いすぎなんよね。

碧羽 逆に迷惑。

恵梨華 見ちよるこつちが疲れるけえね。

碧羽 ちよつと待って！ うちのホテルの部屋ってさあ、三・二って山T言いよったよね？

恵梨華 そうやねえ♪

碧羽 誰が三で誰が二なん？ そのうち一人が尾野？ 紫音、一緒の部屋になるう！

紫音 いいよ！（碧羽とはしゃぐ）

恵梨華（碧羽にくっついて） うちもうちも！

碧羽 じゃあ、三人部屋！（紫音、恵梨華とはしゃぐ）

七菜 ……え？ それおかしくない？

紫音 ほんとじゃ！ 七菜一人になる！

碧羽 ごめん、でもほんと尾野は無理なんよ！ 全部山Tのせいじゃけえね！ クソ山T！ クソ

尾野！（上手ベンチに立ち上がって鞆を振り回す）

音響2

葉

葉がこすれる音がする。

紫音 振り回したら危ないやん！

恵梨華 なんか落ちたよ。

紫音 毛虫やないん？

毛虫が苦手な七菜と紫音は、本気で逃げる。恵梨華は桜の木を見上げて、毛虫の様子を見る。

碧羽 ええええ、毛虫！（慌てて木から離れ、紫音に寄って行き）ねえ、紫音、見て！

紫音 （碧羽を押し返し）無理っちゃ！

碧羽 （七菜に近づいて、背中や頭を見せ）ねえ、七菜

七菜 （嫌悪感いっぱい）碧羽を追い払い）こっち来んでっちゃ！

碧羽 （木の周辺にいる恵梨華の所に戻ってきて）ねえ、恵梨華見て！ 毛虫ついてない？

恵梨華 （碧羽の肩を指さして）ああああ！ そんなかついちよる。

碧羽 （懸命に恵梨華に訴えて）じゃあ取ってよ！ 早く取ってっちゃ！

恵梨華 ……（お道化て）うっそ。

紫音、恵梨華、爆笑。碧羽、むっとする。

碧羽 最悪。なんなんこの木。

恵梨華 桜はつくよねえ、毛虫。

紫音 桜って花だけでええのにね。葉っぱ、いらんけえ。

七菜 毛虫つくのになんで植えるんやろ……。

碧羽 ああ、この木も尾野もイライラする。

恵梨華 （碧羽の頭を撫でふざけた声色で）あらあ、碧羽ちゃん、糖分が足りてまちなねえ。

碧羽 止めてっちゃ。

紫音 じゃあ、駅ビル行かん？

恵梨華 ラテバ？ 行こう行こう！

碧羽 ラテバ！ 行こう行こう！ ヤケ飲みしちやる！

七菜 太るよ！

碧羽 そんなん気にせんもん！

音響3 雑踏

① 一同、駅ビルに向かい始める。

恵梨華 何飲む？

紫音 うち、キャラメルムーチョ！

碧羽 なんかね新しいの出たらしいよ！

恵梨華 ベリーベリーベリーマッチやる！

碧羽 そう、それ！ めっちゃ美味しそうやったやろ……。

恵梨華 うん、三種のベリーがはいっちよる奴。

音響4 iPhone 着信

音

恵梨華 どうしたん？

碧羽 うちや。（画面表示を見て）お母さんから。（みんなから離れて電話に出る）

紫音、恵梨華、碧羽を待つ間楽しそうに会話をしている。七菜は、さっきの部屋割りのことが気になっているのか、仲間たちの会話にノレずにいる。

碧羽 もしもし、今忙しいんやけど。……駅、駅ビル。今から友達とラテバ行くところなんじゃけえ。……じゃけえラテバっちゃ！ ……なんで？ 嫌っちゃ。……お祖母ちゃんが？ 大丈夫なん？ ……良かった。……なんなん、泣きよん？ どうしたん？ ……そうなん。……え！ 連れて行かん方がええっちゃ！ じゃけえ、そのまま帰らせた方がええって。……じゃったらお母さんが直接園まで迎えに行けばいいじゃん。……今何時？ いや、ちよつと勘弁してよ。……そりやあ、お祖母ちゃんは心配やけど、なんでうちがお姉ちゃんを？ ……分かった、分かった分かりました！ すぐに迎えに来てよ！ 絶対やけえね。（電話を切る）

恵梨華 （ぶざけて、関西弁を真似て）碧羽はん、早うしなさい。冷めるやないかあい！

紫音 （関西弁を真似て）何言うてんねん、もともと冷えてるがな。

恵梨華 （関西弁を真似て）あつたかいベリーベリーベリーマッチなんてきもおます。

紫音 きもおます！

碧羽、友人のノリについていけず、よそよそしい。

碧羽 ごめん、行けんくなった。

紫音 （関西弁を真似て）恵梨華はんがしょうもない関西弁始めるから、碧羽はん怒ってしもたで！

恵梨華 すんまへん！

紫音 （甘えるように）ねえ、行こうやあ！

碧羽 いやあ……。

紫音 じゃあ、テイクアウトしたら？

碧羽 お母さんに頼まれて……あ、人と、待ち合わせせんといけなくなっただけえさ。

紫音 なんでもまた、急に？

碧羽 ……お祖母ちゃんが倒れたみたいやけえ。

恵梨華 それ、まじな奴やん。

七菜 大丈夫なん？

碧羽 意識は戻ったみたい。

恵梨華 どの病院？

碧羽 県立病院。

紫音 お母さんどこ？

碧羽 今迎えに来よるけえ。

七菜 お母さんと待ち合わせてること？

碧羽 え……（咲良が駅に近づいていないか見回して）ああ！ そうそう！ そうやね！

紫音 （隣の恵梨華に）でも、あそこの病院からやったら結構かかるよね？

恵梨華 うん。三十分くらいかかるよ。

紫音 ちよつとだけなら行けるんやない？

碧羽、紫音と恵梨華の言葉に、どうごまかそうかと悩む。

七菜 （碧羽の様子を見て）無理……よね？

碧羽 ……そうやね。無理やね。

恵梨華 そんな気分じゃないか。

碧羽 じゃあ、また今度ね！ バイバイ。

一同 バイバイ！

七菜、紫音、恵梨華、駅ビルの方に向かっていく。声だけが遠く聞こえる。

恵梨華 ねえねえ、このあと新しいプリクラ行かん？

紫音 え、新しいプリ機出たん？

恵梨華 見て見て！ 新しい変顔！

七菜、紫音、恵梨華、爆笑しながら退場。

#2 姉妹たちの予定変更

音響5 雑踏②

碧羽、コンビニ側（上手）から来る人々の様子をしばらく見ているが、スマホで時刻を確認し、上手ベンチに座る。ふと、木を見上げて、毛虫がいたことを思い出し、飛び退く。咲良、コンビニ側から登場。肩ひもにお手製のカバーがつけられた鞆を斜め掛けし、全身に力が入ったような歩き方で、ずっと何かを呟いている。

咲良 ……咲良は四時二十分の電車に乗ります。咲良は四時二十分の電車に乗ります。

碧羽 （咲良の前に立ち）お姉ちゃん！

咲良 （まるで何も見えていないかのように無反応に、しかし、すっと身かわして駅への階段に向かう） ……咲良は四時二十分の電車に乗ります。

碧羽 （階段を上って咲良の前に立ち）ちよっと待ってよ、お姉ちゃん。

咲良 （身かわして） ……咲良は四時二十分の電車に乗ります。

碧羽 乗りません。お父さんの方のお祖母ちゃんが倒れたんで。じゃけえ乗らんって言いよるやろ？

咲良 （身かわして） ……咲良は四時二十分の電車に乗ります。

碧羽 （必死で追いかけて）もう、いい加減にしてよ。（咄嗟に咲良の肩を掴んでしまい）お姉ちゃん！

音響6 雑踏

咲良 （肩の痛みでパニックになって叫んだり、唸ったりし始める）うわあああああああ……。

碧羽 ああ！（やってしまったと後悔しながら、慌てて咲良の背中を撫で）ごめんごめん。大丈夫、大丈夫。（周囲の視線が気になって）すいません。すいません。大丈夫、大丈夫。（咲良をなだめながら、ついボヤいて）触られて嫌なら、すぐ気づいてよ！ 大丈夫、大丈夫。

咲良 うろうろうろうろうろう。 （自分の大きな声に耳を塞ぐ）

碧羽 （周りを気にしつつ）すいません。すいません。大丈夫、大丈夫、大丈夫。（独り言）はああああ、じゃけえ嫌じゃったんよ。 ……大丈夫、大丈夫。

咲良 ふううううううううう……だいじょうぶ、だいじょうぶ……碧羽だあ。（碧羽の存在に気づいて微笑むが、碧羽と視線が合うわけではない）

碧羽 「碧羽だあ、お姉ちゃんだあ、あは！」はいつも姉妹でやっている合言葉お姉ちゃんだあ。

碧・咲 （互いの頭をくつつけて）あは。

碧羽 大丈夫、大丈夫。

咲良 （冷静になり、ふと我に返って）咲良は四時二十分の電車に乗ります。

碧羽 （呆れながら）乗りません。咲良は四時二十分の電車に乗りません。碧羽と、ここで、お母さんを待ちます。

咲良 咲良は四時二十分の電車に乗ります。

碧羽 じゃけえ、違う……。（周囲を気にしてちよっと優しい声になって）だから、咲良は四時二十分の電車に乗りません。碧羽と、ここでお母さんを待ちます。

咲良 （混乱を整理しようとして）咲良はあ、四時二十分の電車にい、乗ります。

碧羽 乗りません。咲良は、ここでお母さんを待ちます。ほら、椅子に座ります。

咲良 （碧羽の指示に納得が行ったかのように）椅子に座ります。

咲良、上手ベンチ、碧羽、下手ベンチに座る。

碧羽 ああ、そこ毛虫がいっぱいじゃけえ！ ほら立って！ 咲良は立ちます！ もう言う事聞いてっちゃん！

碧羽、咲良を立たせようとするが、咲良は意味が分からず混乱する。

音響7 接近ベル

ホームのアナウンスと電車の音がかすかに聞こえてきて、その音に反応した咲良が、突然立ち上がる。

咲良 咲良は、四時二十分の電車に乗ります。（階段の方に早足で進む）

碧羽 （咲良を遮って）いい加減にしてよ。咲良は、四時二十分の電車に乗りません。碧羽とこでお母さんを待ちます。（咲良の背中を押して下手ベンチに向かいながら）ほら、椅子に座ります。勘弁してよ。

咲良 椅子に座ります……。

音響8 アナウンス

音響9 接近メロディ①

音響10 バイ

碧羽 （ポケットティッシュを取り出し）ほら、ティッシュ。咲良はティッシュをひらひらします！

咲良 咲良は、ティッシュをひらひらします。

咲良、ティッシュを取り出し、短冊に裂き、空中に放り出し、うっとりとした落下の様子を見つめる。そして、何度も、何度も、同じことを繰り返す。

#3 ヤンキーたちの純情

派手なバイクの音が鳴り響き、翔がダッシュで登場。「やっべえ、やっべえ」と言いながら、何やら探し物をしている様子。舞台下手奥から、舞台上手へと勢いよく走り抜ける。

音響11 コール音

音響12 お留守番サービス

音響13 コール音

音響14 コール音

音響15 お留守番サービス

音響16 コール音

音響17 お留守番サービス

碧羽 （母に電話を掛けるがコール音が続き）なんで出んのん？ 車にスマホ、つないでないん？ 何しよんよ、早よ出てっちや。（留守番電話サービスにつながり）は？ お姉ちゃんが大人しいうちに迎えに来てよ。困るんよ……。

咲良 困る？（恍惚とした表情で、宙に手で大きく漢字を描き、大声で）木が囲まれると、困る。

碧羽 （咲良に近づき周囲を気にしつつ、咲良を咎めて）静かに。迷惑やろ。

咲良 青が争うと静かになります。

碧羽 （慌てて周囲を見回し）すいません、すいません。（周囲に人がいなくなると、ぞんざいな言い方になって、スマホを指さし）見て。電話しよるやろ！ 黙って！

咲良 黒い犬がぼつぼつ歩くと、黙ります。

碧羽 ほら、ひらひらしい！ 碧羽は今電話をしています。

咲良 （呼び出し音を真似て）でんででんででんででんででんででんででんででんでん♪ もしもし、碧羽。

碧羽 歌わんでいい。もう真似せんでいいけえ。咲良はティッシュをひらひらします！

咲良 咲良はティッシュをひらひらします。（ティッシュを裂くことに集中して静かになる）

碧羽、安心して電話を掛け始めるが、つながらずまたイライラし始める。

翔、上手から息を切らして戻ってくる。その後ろから、コンビニ帰りの高校生が歩いてくる。

翔 (上手に向かって) ふぎけんなよ、コンビニ！ コンビニってのは便利になって意味なの！ 売つとらんとかありえんやろ！ コンビニじゃなくて「コンドネ」くらいにしとけ！ コンビニ、コンドネ、「今度ね？」(振り返る)

咲良 (翔の言葉のいくつかをとらえて) ありえんやろ。コンドネ。

後ろの高校生、突然振り返る翔に驚いて、苦笑いする。

翔 (高校生に) 笑った？ 今笑ったよね？ やっぱ俺、芸人なれんじゃね？ ね？

高校生 (翔に話しかけられてたじろぐが、碧羽を見つけ翔から逃げて) 碧羽！

翔 (用事を思い出して) やば。(駅ビルに向かって走り出す)

碧羽、友人(高校生)に話しかけられて焦る。翔、駅ビルに走り去る。

碧羽 (咲良から離れて) やっほー。

高校生 一人？

碧羽 (大袈裟に笑って) あ、うん。一人、一人。

高校生 (嬉しそうに) じゃあ、一緒に帰ろう！

碧羽 あ……ごめんね、今日待ち合わせやけえさ。すぐ行かんといけんのよ。(友人の背を押して駅に向かわせる) ごめんね、バイバイ！

高校生 (なんとなく、すっきりしない表情で) うん……バイバイ。

咲良 バイバイ。

碧羽 (友人の姿が見えなくなると) ……はあ(ため息をつき、うなだれる)。

咲良 (碧羽のため息を真似て) はあ！

碧羽、周りを見渡し、咲良から離れて立つ。

髪を金色に染め、ライダースベストを纏った大が小綺麗な恰好をした香澄とともに登場。大、香澄の後ろ向きで歩き、香澄にまわりついてる印象。咲良、周囲にかまわず、ティッシュを裂いて飛ばし続ける。

大 (香澄に) おらあ、聞いちよるんか！

香澄 (淡々と) 聞いてるよ。

碧羽 (大を見て、ぞっとして呟く) うわ。

大 (悶えて) ああ、好き！

香澄 はははははは。

咲良 (大を真似て) 好き……。

大 (凄んで) おら、かすみい……(香澄と目が合って) あっ！(さらに悶えて) 好き好き好き好き！

碧羽 (ぼそっと) きもつ。(関わり合いにならないように背を向けて離れようとする)

香澄 （咲良に気づき）あ。（咲良に手を出し）よっ！

咲良 （香澄の出した手に自分の手のひらを合わせて）よっ。（ティッシュを落とす）

大 （香澄と咲良のやりとり気づかず、もじもじと照れて言いくそうに）香澄もお、その、俺のこと……あの、好き？

香澄 （咲良にティッシュを手渡すつもりが、大の「好き？」という質問に答えるタイミングになつてしまつて）はい。

大 （自分の問いかけに頷いてくれたと勘違いし、喜び、飛び跳ね）まじまじ？ じゃあさじゃあさ、俺の好きなところ三つ言つてよ。

咲良 （大を真似て）まじまじ？ すきっ！ すきっ！ すき？

大 （咲良に）うっせんだよ。

咲良 うっせんだよ。

咲良、凄まれても気にせずティッシュを裂き続ける。碧羽、咲良の言動に焦るがヤンキーを恐れて近づけない。香澄、咲良に凄む大の気をそらそうと、大に絡む。

香澄 （官能的に）猫背、太眉、立ってる髪。

大 （髪の毛を撫でつながら）がんばっちゃったもんね。

香澄 （さらに官能的に）まさか、待ち伏せ？

大 （子どものように悦んで）うん！

香澄 （突然語気を荒げて）止めてよね、そういうの！

大 きゅうううん……？（青ざめて、うなだれる）

咲良 （大を真似て）きゅうううん……？

香澄 （上手ベンチに座り、文庫本を読み始める。呟くように）はあ、あつっ。

大 （立ち直つて敏感に香澄の言葉を察知し）暑い？（香澄に不快な思いをさせたくなくて、焦つて周囲を見回し、翔を探すが見つからず、地団駄を踏んで）あいつ遅っせえなあ、翔。

碧羽 （大の大袈裟な動きに反応して思わず呟いて）どうした？

咲良 （碧羽を真似て大きい声で）どうした？

通行人（キャリアバッグを持った中年女性）が大に驚いて、キャリアバッグを倒すが、慌てて目を逸らし、駅のホームに向かって走っていく。

咲良 （突然立ち上がつて、キャリアバッグが倒れた音を真似して）ばあん！

大 おい！

碧羽 （自分たちの呟きに大が怒つたのかと縮み上がつて、慌てて咲良を座らせる）……。

大 そののばばあ、ビビってんじゃねえぞ。お前には、関係ねえんだよ。（ちよつと、追つて）お前だけの駅じゃねえだろ！ 人を害虫でも見るような目で見んじゃねえ。

通行人 ぎゃあああ！

香澄 （笑つて）自意識過剰！

碧羽 強っ。

大 なになにに、かすみい？

香澄 自意識過剰。

大 （香澄に凄んで）ああん？（ドスを利かせ、香澄の顎をぐいっと自分の方に引き寄せる）

香澄、大にたじろいだ様子は見せない。碧羽、二人の様子を食い入るように見る。

大 （格好つけて）俺にも分かる言葉で言ってくれんと、（突然甘えた声になって）分からんけえさ。

香澄 （優しく諭すように）自分が思うほど、他人は君のことを……。

大 大！

香澄 大のことを気にしてないよってこと！

大 そうか？（今出会った女性を真似て）こおんな、顔してたぜ。

香澄 気にせず我が道を行けばいいじゃん。

大 おう！俺は俺の道を行く！（香澄の隣に座り）香澄と。（香澄の肩を抱く）

香澄 （観客にうえつという表情を見せて、肩に置かれた大の手を下ろさせて、両手で包み）ええ

っ？ 私と？

大 （悶えて香澄を抱き締め）ああ、もう、溶けそう！

香澄 （大の胸を突き放して、腕を引き離して）暑いなら、離れば？

大 ううん、そうじゃなくて！もお、かすみったらあ。

香澄、大に押し倒されそうになる。

香澄 （自分に近づいてくる大の顔を木に向けて）見て、この木、毛虫いっぱい。ほら、あそこ！

（枝を指さす）

大 きゃ！

大、突然飛び退き香澄を突き飛ばし、木と反対の階段の隅に小さくなる。

香澄 （小声で）マジで……。

大 （震えながら）毛虫、無理い。

香澄 そうなんだ。

碧羽 （ずっと二人を食い入るように見ている、思わず呟く）うちも無理。

咲良 無理。

大 毛虫ぞ、お前。毛虫にビビってなにが悪いんだよ！（手招きしながら）かすみい、こつちこつち。

咲良 毛虫。こつちこつち……。

香澄 （冷たく）ええ、やだ。階段なんか座りたくない。

大 もう、お嬢なんだから！ま、そこも好き好き好き……！（調子に乗って好きを連呼する）

翔が息を切らして戻ってくる。

翔 すんません、アニキ！（大の様子を不審に思っ）アニキ？
碧羽 うわ、もう一人増えたやん。

大 （慌てて虚勢を張って）お前、なんで手ぶらなんだよ！

翔 すんません！ あの、トクホどこにも置いてなくて、普通の甘いコーラだったらあったんすけど。

香澄 もういいよ。私、甘いコーラ飲めないから。

翔 やっぱそうっすよねえ。（階段に座る）

大 （蹴り飛ばして）何座ってんだよ！

翔 あ、すんません！ で、俺、どうしたらいいんすかね……？

大 地球の裏側まで探してくるんじやろうが！

翔 はいい！（走り出そうとする）

香澄 （大に）君が買ってくれた方が……。

大！

香澄 大が買ってくれた方が嬉しいな。

大 なんだと！

香澄 （官能的に）炭酸水でいいから。

大 も、仕方ないなあ。

香澄 （さらに官能的に）強いのが、好き。

大 （自分のことを言われたと思）おう。（キメポーズ）

大、コンビニに向かって退場。翔、香澄の横に座る。

翔 助かりました、香澄さん。はあ、暑っ！ あの、普段何してる人なんすか？

香澄 読書してる人。

翔 じゃなくて、毎日何してるんすか？

香澄 おもしろいこと、探してる。（翔に向かってジャブを始める）おらおら！

翔 （ジャブを受け止めながら）じゃなくて、どうやって食ってるんすか？

香澄 ひ・み・っ！

翔 ひ・み・っ！

香澄 やです！

碧羽 ひみつ？

咲良 ひみつ！

大、コンビニから帰ってきて、じゃれ合っている二人を目撃する。

大 （翔の香澄への馴れ馴れしい態度に激怒し）お前、香澄の半径三メートル以内に近づくんじやねえよ！

翔 （一瞬驚くが、すぐに立ち直って、軽く）あ、すみません、アニキ！（まあまあと大をなだめるかのように近づく）

大 （翔を蹴り飛ばし）お前、馴れ馴れしいんじや。モーターズの社長も言いよったやろが！ 親しき仲にものお、定規ありじや！ 香澄とは三メートル、（少し勢いをゆるめて）俺とは三十センチで許しちやろう。

碧羽 定規？

香澄 （鼻で笑う）ふふ。

翔 （さっと立ち上がって大の肩に手を回し、自分と大の間の距離を示すかのように）OK、アニキ！ 三十センチ。

大 じゃけえ馴れ馴れしいって言うたじやろうが！（蹴り飛ばす）

翔 （勢いよく転がり、咲良の座っているベンチの前に跪く形になる）あああ！ すみません！ すんません！

大、香澄のもとに行き、香澄の頬に炭酸水を当てて、何やら呟く。香澄、大を諫めている様子。

香澄 （大に）今のはちよつとないかな……。

咲良、目の前に跪く翔を見て、翔の背中をさすり始める。碧羽、大と翔の諍いに巻き込まれたくないくて、距離を取り背を向けてスマホをいじっていて、咲良の行動に気づかない。

咲良 大丈夫、大丈夫……。

翔 うわつ。（背中を触られて驚き振り返って咲良を見つめる）……うん。

碧羽、咲良が翔の背中をさすっているのに気づいた瞬間、飛んでくる。

碧羽 お姉ちゃん、知らん人やろ？（翔に）すいません。すいません。（咲良に）ほんとに止めて。

ほんとに止めてっちゃ！

咲良 上が杖を持つと止める。

碧羽 咲良は椅子に座ります。咲良はティッシュをひらひらします。

咲良 咲良はティッシュをひらひらします。

碧羽 知らん人に話しかけちゃいけないの！

翔、咲良を見つめたまま放心状態で這ったまま大のもとに移動し、大の脚に巻き付く。

大 お前、三十センチって言ったじやろうが！

（呆然と）……やばい。

大 何がじゃ？

大 やばいっす。

大 何かっちゃ！

翔 自分、恋……？ 恋という深い穴に落ちてしまったつす。
大 誰の穴にか？
翔 あっちのベンチの美少女ですう（身悶える）。

大、香澄、下手ベンチを見る。碧羽、翔の話が耳に入り見返す。

大 どっちかあや？

翔 ちゃんと顔見てくださいよ！

大 （脚に巻きついている翔に） 離せよ！

翔 あ、すいません。

大 （咲良と碧羽に近づき、顔を確認しようとして） どれどれ？（顔を背ける碧羽に） おい！
咲良 どれどれえ。

碧羽、大に顔を見られないように顔を背ける。

大、一度去ったように見せかけて、突然振り返り碧羽の顔を見る。

大 （碧羽の顔を見て大爆笑） そりゃ、そうじゃの！（翔に） お前、コクって来いよ。

翔 でもお、今さっき出会ったばかりだし。

大 お前、男にならんでどうするんか！ 俺を見習え！

香澄 あはははは。

大 かすみい、笑うとこじやなあい！

翔 はい！ 俺、男になります！

大 おお！

翔、咲良に向かっていく。碧羽、翔たちの会話を聞き、咲良を立ち上がらせようとする。

碧羽 立ってっちゃ。知らん人に絡まれるけえ。咲良は立ちます！ もう、言うこと聞いてよ！ お姉ちゃん！ 咲良は立ちます。

大 （翔が木の下を通ろうとするのを見て） お前そこ毛虫おるぞ！

翔 （我関せずといった様子で） 全然大丈夫です。

大 全然大丈夫なんか……すごいの。

香澄 ふふ！

咲良、碧羽の言葉を受けつけず、ティッシュの短冊を飛ばし続けている。翔、咲良に近づく。

翔 （舞い散るティッシュに飛びつき） お嬢さん、天使の羽が落ちましたよ。

碧羽 やめてください。（翔の差し出したティッシュの切れ端を取って投げ捨てる） 姉は、あなたみたいな人と付き合うことは絶対に無いんで！

翔、大のもとに逃げ帰る。

翔 アニキい！ 隣のブスに邪魔されたんですけど！

碧羽 （むっとして）ブス？

大 ブス？

香澄 妹ね！

大 妹なんか関係ねえって、ひるまず行って来い。

翔 はい！

碧羽 ほら、立って！ 変なんが来るけえ。立ってっちゃ！（咲良からポケットティッシュを奪い

取り）ティッシュ！

咲良 ああ！ ない！ ない！ ない！（両手を振りまわして、ティッシュを奪い返す）

翔、恰好をつけて口笛を吹こうとするも音が出ない。咲良と碧羽の座るベンチの周りを鳴らない口笛を吹きながらぐるぐる回る。碧羽、ベンチから立ち上がり、咲良の盾になろうと、翔について回る。

大 おい、翔！ お前、吹けねえ口笛吹くんじゃねえよ！

碧羽、翔が咲良に関わらないようにガードする。

翔 あー、いってて！（わざとらしく、ベンチの後ろから咲良の前によろけて）大丈夫でした？（咲良の肩を抱く）

咲良 （痛みでパニックになって立ち上がり、動き回る）あ、あああああ！

咲良、翔、悲鳴を上げながら下手ベンチを中心に右往左往する。碧羽、咲良を追いかける。

翔 え、ちょっと待って！

碧羽 （咲良の背中を撫でながら）大丈夫、大丈夫、大丈夫。

翔 アニキ、俺どうしたらいいんすか？

大 ここは、どんと行くしかないじゃろ。

翔 どんと？

碧羽 （翔に）だから、やめてくださいって言いましたよね。

翔 君、関係ないんで。（大に）アニキい、ブスの妹がうるさいんですけど。

大 オッケー、こっちは任せろ！（木の下のいる碧羽を羽交い締めにして碧羽の動きを止め、耳元で囁く）ちょっと妹ちゃあん。綺麗なお姉ちゃんにヤキモチ焼くなんて、カッコ悪いよ！

音響18 雑踏③

きやあ！ そういうのじゃないんで……。

翔（翔の前に立って真剣に）待って！ 遊び半分だったら、（両手の人差し指をクロスさせて茶目っ気たつぷりに）めっ！

俺、本気なんで。

香澄 （笑顔で頷く）そう。（咲良に手を出して）よっ。

咲良 （香澄の手に自分の手を合わせて）よっ。

碧羽 やめてください。姉には事情があるんです！

香澄 （碧羽を覗きこんで）へえ、あなた、咲良のボディガードなんだ！（周囲の通行人の視線に気づき）ありやりにやりや、みんな見てるよ。

大、香澄に言われ、凄みながら周囲を見回す。

大 お前らこつち見んじゃねえ。ただの兄弟喧嘩じゃ。（碧羽の肩を抱き、上手ベンチにともに腰掛け）なあ、妹よ。

香澄 （翔に咲良を近づけて）頑張つて。（大と碧羽が木の下にいることに気づいて）へえ、毛虫大丈夫になったんじゃん。

大・碧 毛虫いいい！

大、碧羽とともに飛び退き、二人、倒れこむ。香澄、碧羽を起こそうと手伝う。碧羽、香澄を拒絶し、自分で制服についた砂埃を払う。香澄、大が立ち上がるのを手伝い、砂埃を払う。

翔 （スマホを取り出し咲良に）よかったら、ラインのアカウント教えてもらっても……。

咲良 （スマホを見て、呼び出し音を歌い始める）でんででんででんででんででんででんででんでん♪ もしもし、碧羽。

翔 アオバさんって言うんすか？ アオバ……。

碧羽 もう余計な事言わんでええええ。（咲良を引っ張って翔から離れさせようとする）

咲良 （碧羽の顔が目の前にあるのに気づき）あ、碧羽だあ。

碧羽 お姉ちゃんだあ。

碧・咲 （互いの頭をつけて）あは。

香澄 へえ、妹、アオバって言うんだ！

翔 （香澄に）妹？

香澄 （二人を指しながら）サクラにアオバか！ 親のネーミングセンス、最高！

翔 サクラ？ サクラさん……。

大 桜に葉っぱか？ 残念だなあ、妹ちゃん。めげずに生きて行けよ。

香澄 （咎めるように）大。

大 （名前を呼ばれて嬉しくなって）うん、そう、大！

翔 ……サクラさん。（勇気を出して咲良の肩を抱く）

咲良 あ、ああああああ。（肩の痛みにパニックを起す）

翔 え、すいません！ すいません、すいません！

碧羽 ああ、もう！（咲良を捕まえて）大丈夫、大丈夫……。

咲良、翔、またバタバタと走り回る。碧羽、咲良を止めようと追いかける。

香澄 あ、警察だ。

大 （周囲を睨み回しながら）誰かチクリやがったな！

香澄 そうかな？ 大のバイクのところにいるよ。

翔 あの改造まじかかったつすかね？

大 やべえ！ おい翔、行くぞ！（退場）

翔 はい！（一旦退場後、戻ってきて）サクラさん、また会えますよね！

咲良 また会えますよね。

碧羽 お姉ちゃん？

翔 まじで？

咲良 まじまじまじ。すきっ！ すきっ！ すき？

碧羽 お姉ちゃん！

翔 （驚いて、舞い上がり）……好き？

咲良 まじまじまじ。すきっ！ すきっ！ すき？

碧羽 お姉ちゃん。

翔 好き！

碧羽 （翔に）あの、真似しただけなんです。姉は普通じゃないんで、もう行ってください。

翔 おまえこそ普通じゃ！ つまらんのお。じゃあな、葉っぱ！（退場）

碧羽 はあ？

咲良 じゃあな、葉っぱ！

大 （遠くから叫んで）かすみい、お前も来いよお！

香澄 （冷たく）やだ。ここで本読むんだもん。

大 かすみい……。

咲良 やだ！ やだ、やだ。

碧羽 知らん人に話しかけちゃいけないの。じゃけえ、絡まれるんよ。

香澄 （彫像の二人の一方をいじりながら）咲良はやっぱりおもしろい。

咲良 おもしろい。

碧羽、警戒しながら香澄を窺う。

香澄 （彫像の他方をいじって）アオバは、固い。

碧羽 は？ 碧羽？（なんで呼び捨て？）

咲良 古いものが囲まれると固い。

碧羽 黙って！

咲良 黒い犬がぼつぼつぼつ歩くと黙ります。

碧羽 黙っちゃって！

香澄 （もと触れていた彫像の頭を撫でながら）咲良は柔らか頭だからね！

咲良 咲良は、柔らか頭。

香澄 （もう一方の彫像に向かって）アオバも楽に生きなよ。

咲良 楽に生きなよ。

碧羽 なんてあなたなんかそんな風に言われなくちゃいけないんですか？

香澄 ごめん、調子乗った！（上手ベンチに座って、文庫本を開く）

碧羽 は？ ……なんなん。

咲良 なんなん。

香澄 思ったようにならないから、おもしろいのかなあ。

碧羽 何も知らんのに言わんで。

咲良 言わんで。

香澄 ごめん。小説の話。

碧羽 （こみ上げてくる怒りが抑えられずきつい言い方で）咲良は、椅子に座ります。

咲良 （碧羽を真似て）咲良は、椅子に座ります。

香澄、再び本を読み始める。碧羽、咲良、下手ベンチに座る。咲良、貨物電車の音を聞き立ち上がる。

音響19 接近ベル

咲良 咲良は四時二十分の電車に乗ります。

碧羽 出たやろ、四時二十分の電車。咲良はここでお母さんを待ちます。ほら、ティッシュをひら

ひらします。

音響20 アナウンス

音響21 接近メロディ②

咲良 ティッシュをひらひらします。（空のティッシュの袋を振り回して）ない！ ない……。

碧羽 は、もう無くなったん？ うるさい、うるさい！ 鞆の中、あるんやろ？ うるさいって。

（咲良の鞆から、箱ティッシュを取り出し）ほら。咲良はティッシュをひらひらします。

咲良 咲良はティッシュをひらひらします。

#4 主婦たちの厚情

三木と林が福岡の名産品の紙袋を下げ、「桜坂」を気持ち良く歌いながら駅ビルから出てくる。

三木 （突然立ち止まり）「桜坂」、素晴らしかった！（ぶつかってきた若者を追いかける）

林 （三木が離れていることに気づかず）福岡まで行った甲斐があったよねえ。（振り返ると三木がいない。いつものように他人に説教している様子にうんざりする）

三木 ちよつと、あなた。歩きスマホは危ないでしょ？ ちよつと、聞いているの？ （若者に睨ま

れ）ちよつと！ 気をつけなさいよ。

林 （ロータリーにいるはずの夫の車を探しながら）なんでまだ来てないん？

碧羽、三木に気づき、彫像の陰に隠れようとして、香澄と目が合って戸惑う。が、無視して隠れる。

三木 （林のもとに戻ってきて）ごめんなさいね。ほっとけなくって。

林 三十分ロータリーで待ちよつとって言ったのに。

三木 この時間じゃけえ、道が混んじよるんじやない？

林 ルーズなんよ。

三木 お宅のましゃ（福山雅治の愛称）、お会いするの楽しみだわ！

林、スマホを取り出し、夫に電話を掛ける。

音響22 コール音

林 顎のラインだけえね。それも若い時。今は二重顎になって見る影もないよ。

三木 二重顎のましゃって。「二重顎のましゃ」から、太った福山雅治がギターを弾いている様子を真似て、「ワ〜知覚と快楽の螺旋〜」を口ずさみながら、気持ち良くなって踊り出す）

林 （三木の様子を冷たく見ながら、電話の向こうの夫に向かつて）もしもし、今どこ？ 時間過ぎとらんやけど。そんなん知るかいね。もう分かったけえ、はよ来てよ。じゃあね。（電話を切る）

三木、気持ちよくなって、コンサートにタイムスリップ。吐息だけでましゃへの愛を訴える。

三木 ましゃ！ 抱きしめて！

林 ごめんなさいね。二号線混んじよるんて。

三木 （肩を叩きながら）いいええ、こちらこそ、乗せてもらって、ごめんなさいね。

林 （肩を叩き返して）いいええ、こちらこそ、いつもお世話になっちよんじやから。

三木 （肩を叩き返して）いいええ、こちらこそ。

咲良 いいええ、こちらこそ。

三木、林、どこからか響いてきた声に驚き、声の主を探す。三木、ティッシュで遊んでいる咲良を覗き込む。林、また、三木が知らない人に声をかけてトラブルになるのではないかと警戒する。

三木 （咲良だと気づき）あら、咲良ちゃん？ 咲良ちゃんよね？ なんでこんなところにおるん？

お母さんは？

咲良 （ティッシュの切れ端を三木に吹き付けて）お母さんは？

三木、顔に息を吹きかけられて驚き、大袈裟に振り払いながら、後退りする。

三木 （散らかったティッシュを見回し）あらあら、こんなに散らかして。（ティッシュを拾い始める）もう、直子（碧羽と咲良の母の名）ったら何考えちよるん！ 大胆っていうか、無責任っていうか……なんで一人で歩かすかな。

林 （どなた？ と尋ねるかのよう）三木さん？

三木 ああ、姪っ子の咲良。妹の娘。

林 ああ、姪御さんか。

三木 この子ちよつと……（林に顔を近づけて）障がいが。

咲良 ちよつと……。

林 （大袈裟に否定して）あら、そうなん。全然そんな風に見えんよ。可愛いし、美人さんやね。

碧羽、彫像の後ろから林の様子を白けた表情で見る。林、ロータリーに夫の車が来ないか探す。

三木 そう、綺麗な赤ちゃんじゃったんよ。初孫じゃったけえ、うちの両親もそりや喜んでね。私の肩身が狭くなるくらい。

林 ……ああああ…。（苦笑い）

三木 （舞台中央の桜の木を見上げながら）桜の満開の日でね。

林 じゃけえ、サクラ？

咲良 咲良！

林、咲良のオウム返しが気になって警戒し始める。

三木 （林が真剣に聞いてくれることに嬉しくなり、調子良く語り始める）じゃけど、言葉が出なかった…。もつたないじゃる。家族一同大号泣。

咲良 大号泣。

林 ショックじゃったろうね…。

三木 それが、凄いやな。シヨックどころか、ますます強くなってね。

林 母は強し…。ってね。

三木 反対押し切って、二人目も産んだけえ。

林 ……二人目？

三木 親も一生面倒見られるわけじゃないじゃない？ 将来を考えたんと思うんよね。

碧羽、隠れていた彫像の裏から茫然と立ち上がって動けない。

林 一生は無理よね。それで二人目か。

三木 さつさと産んでもうたけえ。障がいのある子を抱えてやめちよけって周りがどんだけ言うても、いつとも聞かんかったんやけえ。ねえ咲良ちゃん、凄いやな！（咲良の肩に触れる）

咲良 あ、あ、ああああああ。（肩に触れられ痛みでパニックになる）

三木、林、パニックになった咲良を見て驚き逃げ回る。碧羽、彫像の陰から出てきて、咲良の背中を撫でる。

碧羽 大丈夫、大丈夫、大丈夫。大丈夫…。

三木 碧羽ちゃん、おったの？

碧羽 こんにちは。

三木 こんにちは。（林に）これが二番目の碧羽。

碧羽 ……こんにちは。

林 （動揺しながらも、平気そうに装って）こんにちは。

三木 碧羽ちゃん、おばちゃんビックリしたんよ。咲良ちゃん、いきなりああああああって叫び出

林
 して、追っかけて来たんじゃないやねえ。（林に）ねえ。困った、困った。
 うん……。

咲良
 （大声で）木が囲まれると困る。

三木
 （咲良にぎよっとしたのち、微笑んで）咲良ちゃんも、困ったよねえ。

咲良
 （さらに大きな声で）木が囲まれると困る。

林
 （どう反応して良いか分からず）うふふふ……。

三木
 （咲良に再び驚いたことを隠そうとしながら、碧羽に向かって小声で）お母さんにもおばちゃんから言っとくけど、咲良ちゃんを放ったらかしにしちゃあ、いけんよ。あなたがちゃんと面倒見んと。あなたのお姉ちゃんじゃないやねえ。

林、
 気まづくなって少しずつ離れていく。

碧羽
 ……はい。（林にも聞こえるように大きな声で）でも、姉は一人でもちゃんと通勤できます。

林、
 作り笑顔で頷く。

三木
 そうなん？（咲良に向かって子どもに話しかけるように）咲良ちゃん、偉いねえ。

咲良
 えらいねえ。

三木
 （碧羽には鋭く）でも、迷惑かけんようにせんと。今みたいに理由もなく暴れ出したら困るやろ？

咲良
 木が囲まれると困る。

三木
 （再び「困る」と言ってしまった自分に気づき苦笑い）ふふふ。

碧羽
 理由もなく暴れることはありません。（言いにくそうに）さっき、伯母さんが……肩を触ったから。

三木
 は？ 何？ 感覚過敏？ 首でしょ？ 首じゃなかったの？

碧羽
 いや、首から肩にかけてです。

三木
 （失笑）じゃあ……、私のせい？

咲良
 せい。

三木
 ……ごめんなさいね。（急に大声で）でも、こんなに散らかして、迷惑でしょ？ ねえ、林さん？

林
 ……（苦笑い。どう答えて良いか分からず）うん、そうやねえ。

碧羽
 後で片付けるつもりでした。姉も、一通りやって満足したら、最後にはちゃんと片付けます。

三木
 じゃあ、余計な事したかしら？（集めたティッシュを碧羽に渡す）

咲良
 余計な事。

碧羽
 あ、ありがとうございます。

三木
 そうは言うてもね、ちよっとこっち！（碧羽を自分の方に引き寄せて咲良から離し）普通の子じゃないんじゃないやねえ、よう見ちよかんと、何があるか分からんよ。社会福祉じゃ何じや言うけど、結局は家族の責任じゃないやねえ。碧羽ちゃんも大変じゃろうけど……。

咲良
 （夕日に反射している林の眼鏡が気になり手を伸ばして少しずつ林に近づく）キラキラ……。

林 （近づいてくる咲良に驚いて）キラキラ？（焦って周囲に何か光っているものがあるかどうか探し始める）

咲良 （眼鏡を掴んで）キラキラ！

林 （咲良の手が伸びた瞬間、全身を硬直させて）……三木さああん……。

林の声に碧羽と三木が振り返る。碧羽、咲良のもとに走っていき、咲良の手を眼鏡から引き離す。

三木 ほら、言わんこっちゃない！

碧羽 ああ！ もうなんしょん！ すいません、すいません。

車のクラクションが響く。

音響23 クラクション

林 （一刻も早くその場を離れたい様子で）うちの旦那、来たみたいやけど。三木さん、どうして？

三木 ごめんなさいね、林さん。乗せてもらってもええ？

林 私、先行つちよくな。三木の返事を待たずに退場）

咲良 ない！ ない……。眼鏡を探そうとする）

碧羽 （咲良にティッシュを差し出して）ひらひら、ひらひら。

咲良 （眼鏡への気持ちがティッシュに切り替わって）ひらひら、ひらひら。

三木 碧羽ちゃん、おばちゃん、二重顎のまじやに会いに行かんといけんけえ、咲良ちゃんの面倒見ちゃげてね！ 咲良ちゃん、バイバイ。

咲良 バイバイ。

三木 そうだ、はいこれ（紙袋から二〇加煎餅の小箱を取り出し）、お土産の二〇加煎餅。二人で半分こして食べてね。じゃあ行くね。（痴漢注意の看板を指して）ああ！ あんな人もおるんじやけん気を付けんさいよ。じゃあ、待たせちよるから行くね。（林夫妻の車に向かって）ごめんなさいねえ、林さあん！

三木、ロータリーの向こうに止められた林夫妻の車に向かって退場。

碧羽 ……なんなん。

咲良 なんなん。

碧羽 こんなんいらんし。

咲良 いらんし。

碧羽、二〇加煎餅を手で弄んだ後、処理に困って彫像の上に置くと、彫像に目がついたように見える。香澄、それを見て嘔然とする。

香澄 ええっ……。

碧羽 （ロータリーに向かって歩く咲良を止めて）ああ、もう危ないっちゃ！ どこ行きよん。咲

良はティッシュを拾います！

咲良はティッシュを拾います。

碧羽 口ぼつかり。面倒も見たことないくせに。

咲良 くせに。

碧羽 なんなんよ。何も見ん偽善者が（ちらりと香澄を見て）傍から勝手なことばつか言うな！

咲良 言うな。

香澄 （聞こえるか聞こえないかの声で）え……私？

碧羽 袋は？（咲良の鞆の中から袋を取り出しティッシュを拾い始める）

大、警察官（袖の中、声のみ）に頭を下げながら駐輪場側から登場。香澄のもとに向かおうとしている。香澄、大に気づいて駆ビルの方に退場。

大 もう、すいませんっておまわりさん！ じゃ、連れ、待たせてるんで。今度はちゃんと鍵、掛けますから。（振り返った途端ぼそっと）うっせーな。

警察官 ああん？

大 （まずい、聞こえてたか？ というかのような表情で）すいませんって！ じゃあ、失礼します。（敬礼をする）

大、ベンチを見て、香澄がいないことに気づき、ティッシュを拾っている碧羽に声をかける。

大 おい！ 葉っぱ、香澄どこかあ？

碧羽 （わざと知らないふりして）……。

咲良 葉っぱ！

大 （語気を荒げて）もう葉っぱ！ どこかつちゃ！

碧羽 は？

咲良 葉っぱ。

碧羽 （上手ベンチを確認して）さっきまでここにいたけど。

大 もう、かすみい！

大、きよろきよろしながら駆ビルの方に退場。

碧羽 ねえ、なんか散らかさんもの持ってないん？ 見せて。（咲良の鞆の中を探してプチプチを見つけ出し）あ、プチプチ！ プチプチあるやん。咲良はプチプチをします。

咲良 咲良はプチプチをします。

碧羽 椅子に座ります！

咲良 椅子に座ります。

咲良、下手ベンチに腰掛ける。碧羽、ため息をつきながら、ティッシュを拾い続ける。

#5 誘惑と衝動

黒の喪服を着た酔人、下手から千鳥足で香典返しと思わしき紙袋を持って登場。通行人にぶつかっては、謝りながら進む。

七菜、紫音、恵梨華が駅ビルの方から賑やかに出てくる。七菜も、部屋割りで壊した機嫌はかなり回復している様子。七菜以外は、空になったラテバのカップを持っている。碧羽、咲良が散らかしたティッシュを黙々と拾い続けて友人たちには気づかない。

紫音 （カップを高く掲げて）もう、このカップ絶対捨てられんわ……。

恵梨華 十人おったら三十人はイケメンって言うよね。

七菜 ええっ、ない！

恵梨華 はあ！？

七菜 （カップを指さし）捨ててきいね。

恵梨華 いや、一生取っちゃよく！

碧羽、友人に気づいて、彫像の影に隠れるが、鞆をベンチに置きっぱなしにしていることに気づき、鞆を取りに行くか逡巡する。鞆には、友人たちと色違いで買ったアクセサリーが付いており、碧羽のものだとすぐ分かってしまう。

紫音 （カップを七菜の前に掲げて）見て見て！ 文字すらイケメン！

恵梨華 （紫音を真似てカップを掲げて）乾杯！

七菜 （紫音のカップに書かれた文字を見て）「イケメン最高！」ってっただけナルシなん。

紫音 違うっちゃ。「イツメン最高！」って書いてもらったの。

七菜 イツメンか。

恵梨華 （尾野を真似て）いつものメンバー、最高って書いてもらったの。

紫音 （尾野を真似て）もう尾野ええけえ。

七菜 （変なイントネーションで）はいはい、イツツメンやろ！

紫・恵 イツツメン？（顔を見合わせて）イツツメン。

七菜 （正しいはずのイントネーションに直して階段を下りながら）もう、イツメン最高！

恵梨華 （階段を下りながら、七菜の変なイントネーションで）イツツメン最高！

酔人 あははは……。

紫音 （酔人の笑いに驚くがなにもなかったかのように階段を下り）イツメン最高！ ふう！

七菜 （恵梨華のしつこいいじりに、笑いながら）もうええけえ。

碧羽、鞆を取りに戻るが、再び隠れることを諦めて、咲良を隠すように友人たちに話しかける。

碧羽 （七菜の肩に手をかけ）ベリーベリーベリーマッチどうやった？

恵梨華 碧羽！ めっちゃおいしかったよ！

碧羽 （大袈裟に）いいなあ！ 飲みたかった！

七菜 （碧羽に触れられてさっき疑った碧羽との友情が戻ってきたみたいで嬉しい）碧羽、待ち合
わせは？

碧羽 まだ来んのんよね。

紫音 （酔人が気になり、離れようと碧羽を引っ張り）ほら、じゃけえ一緒に行けば良かったやろ？
碧羽 そうでした。

恵梨華 碧羽、今からプリクラ撮りに行くんやけど一緒に行かん？

碧羽 （もう我慢できない！）行きたい！ 行きたい！

紫音 イツメン最高って思ったやろ！

碧羽 思った！（咲良の事を思い出して）あ！ でもなあ、（咲良が見えないように隠しながら、友
人たちを進ませて、咲良の座るベンチ前を通過させる）お母さん、そろそろ来る頃やしなあ。
でもプリクラぐらいやったら許してくれると思うんやけど。

七菜 じゃあ、電話してみいね。

碧羽 なかなかつながらんのんよね。

七菜 運転中はね。

紫音 でもプリクラなんて一瞬やけえ、大丈夫やろ。

恵梨華 じゃあ、ライン入れとけば？

碧羽 うん。じゃあ、そうする。連絡して行くけえ、先行つとつてよ。

紫音 （顎で酔人を指して）……ねえ見て見て見て。あの人やばくない？

酔人、女子高生を遠い目でじっと見つめて、ふふっと力なく微笑んだり、突然顔をしかめて涙ぐん
だりを繰り返す。

碧羽 （咲良の事を言われたと思って、必死で話題を変えようとして）なにになになに？ 新しいプ

リクラ、何がすごいん？ 目が十倍になるとか？ 美白で肌が透明になるとか！？

紫音 違うっちゃ！ そこに座つとる人！

碧羽 （友人たちの背中を押して無理矢理ゲームセンターの方に進ませようとして）ああ、もうえ
えけえ、行ってっちゃ。

紫音 （碧羽をかわして）見て見て！ あの人、痴漢やない？

恵梨華 （痴漢注意の看板を見て）黒いスーツ。眼鏡。三、四十代！

碧羽 （咲良の事を言われたのではないとわかって安堵し、つい大声で）なんだあ、痴漢かあ。

紫音 碧羽！ 声、でかいっちゃ！

碧羽 （指さして）黒いスーツ着ちよる人なんてどこにでもおるやろ。

七菜 恰好だけで痴漢にされてもね。

恵梨華 でも、なんか苦しそうな顔しちよるやん。ちよつとキモい！

酔人、苦しそうに体勢を変える。それを見て、一同悲鳴をあげる。

碧羽 （再び指さして）いやいや、痴漢が痴漢注意の看板の側に堂々と座るか！？

恵梨華、碧羽の腕を抑えて指さしを止めさせる。

紫音 （碧羽に）そりや、そうか！

碧羽 （紫音たちの背中を押しながら）じゃろ？ ほら、行って行って行って。先行って順番取っちゃってよ。すぐ行くけえ。

紫音 碧羽、気を付けてよ、痴漢。

碧羽 はいはい。せいぜい気をつけます！

恵梨華 碧羽一人で大丈夫かね？

七菜 強いけえ大丈夫やろ。

七菜、紫音、恵梨華、ゲームセンターへ向かって退場。碧羽、友人たちを見送った後、咲良の腕をとる。

碧羽 （腕時計で指示しながら）咲良は四時五十分までプチプチをします。

咲良は、碧羽の言葉が分かっているのかどうか不明であるが、碧羽の思いに反発するかのようには、プチプチを捻りまとめて潰してしまう。

碧羽 なんで全部潰しよん。なんしよん。もうやめてっちゃ。

咲良 （潰せるプチプチがなくなつたと訴えるかのように両手を振り回し）ない、ない、ない！

碧羽 全部自分で潰したんやん。

咲良 ない！ ない！ ない！（イライラと碧羽が片付けたティッシュの屑の入った袋を振り回して、ティッシュをバラまきながら）ない！ ない！

碧羽 ああ！ 友達が待っちゃよんよ！ せっかく片付けたのに！（袋を奪い、箱ティッシュを手渡して）ティッシュ！ 咲良は四時五十分までティッシュをひらひらします！ 咲良は？（続きを言わせて、これからの行動を確認させようとする）うっざ。咲良は？

咲良 咲良は四時五十分までティッシュをひらひらします。咲良は四時五十分までティッシュをひらひらします。

碧羽 （咲良の言葉に合わせて）……四時五十分までティッシュをひらひらします。

碧羽、咲良の様子を見ながら、少しずつ後退りし、友人たちの待つゲームセンターへと向かう。

咲良、碧羽が立ち去った後も、夢中でティッシュを飛ばしている。

酔人、上手ベンチの上で悶えて耐えきれず木の根元に嘔吐する。その様子に、咲良は箱ティッシュを抱えたまま立ち上がる。暗転。

音響 2 4 桜色舞うころ②

照明 3 溶

#6 行方不明

舞台装置そのまま。（溶明）舞台上には誰もいない。

碧羽、七菜、紫音、恵梨華がはしゃぎながら戻ってきて、プリクラの変顔を再現する。

照明 4 駅夕

1

七菜 このプリめっちゃウケるんやけど。なにこの変顔。碧羽、やばあ！

碧羽 七菜も他人の事言えんやろ！

碧羽、七菜「うえええ！」と叫びながら、変顔バトルをする。紫音、恵梨華、変顔のまま顔を見合わせにらめっこを始める。

紫音 イツメン最高！

一同 最高！ ふう！

恵梨華 ……でも修学旅行、このメンツでプリ撮れんもんね。

碧羽 あの人がおるもんね。（尾野を真似た言い方で）「ねえねえねえ、変顔ってどれぐらいやったらええんかね？ これぐらい？ これぐらい？ これぐらい？」

紫音 もう、思い出させんですよ。（下手ベンチの上にあるティッシュを払い除けて）汚な！ なんでこんなティッシュだらけなん。

碧羽 ……え？

碧羽、下手ベンチに咲良がいないことに、ひとり気づき、青ざめて周辺を探し始める。

恵梨華 （大袈裟に深刻な顔をして）もしかして、事件？

紫音 痴漢？

七菜 黒スーツ！（酔人の座っていた場所を指して）おらんやん。

紫音 逃げたか。

七菜 （動き回る碧羽を見て）碧羽なんしょん？

紫音 もう尾野の真似はええけえ、こっちきいよ。

恵梨華 （おちゃらけて）なん変顔しちよん。ブッスウ。

紫音 （恵梨華に便乗して）ブッスウ！

碧羽 （いらつとして）もとからブスやけえ。

紫音 かわいいよ。

恵梨華 （ノリで）思っけないくせに！

碧羽 プリクラなんて行くんやなかった……。 （コンビニの方に向かって走り出す）

恵梨華 （紫音の変顔を見て笑い）紫音、やばあ。

碧羽 （ふと立ち止まり、友人たちを振り返ってためらいながら戻ってきて）ねえねえ、さつきさ、ここに座っちゃった……。

紫音 さつき？

碧羽 あ、プリクラ行く前。

恵梨華 痴漢？

一同、痴漢という言葉に再び盛り上がる。

碧羽 痴漢じゃなくて。こっちのベンチ。

七菜 あ、ピンクの服着ちよった子？

碧羽 その子その子！

紫音 そんな子おった？

七菜 おったよ。

碧羽 その子さ、うちの……うちの知り合いなんじゃけど、今日乗せて帰らんといけんかったんやけど、プリクラ行っちゃる間におらんくなっちゃったんよね……。

七菜 （笑いながら）トイレやないん？

恵梨華 （碧羽の背中を押して、痴漢のポスターの前に連れて行き、深刻そうに）もしかして、痴漢やない？（後ろにいる友人たちの方を振り向き、声を出さずに大笑いし始める）

碧羽 （凍り付いてポスターをじっと見て）……痴漢？

紫音 （ベンチの下に置かれた紙袋に気づき）何この紙袋？

恵梨華 （大袈裟に）ああ！ 爆発するんやないん？

紫・恵 （ふざけて、尾野の真似をして）どうするどうする！ どうするどうする！

七菜 （彫像の上に載せられた二〇加煎餅の箱を見つけ）ああ！ 顔がついちよるよ！

恵梨華 （ふざけて）痴漢がこっち見よる！（尾野の真似をして）どうするどうする！

一同、二〇加煎餅を指さして尾野の真似をしながら大爆笑。

碧羽 ……そんな変なこと言わんでよ。

一同、碧羽のリアクションに驚き、気まずい空気が流れる。

恵梨華 ごめん。

紫音 （あ、良い考え思いついたとでも言いた気に）電話したら！

碧羽 携帯持ちちよらんし。

恵梨華 携帯持っていないって……。

紫音 （考え無しに）昭和じゃん！

恵梨華 それな！

紫・恵 （紫音の言葉に盛り上がって爆笑）あはははは！

碧羽 （語気荒く）全然面白くないけえ。（コンビニに向かって走り出す）

七菜 どこ行くん？

碧羽 コンビニ！

碧羽、コンビニに向かって走り去る。

紫音 （戸惑って）なん、キレちよん。

恵梨華（自信なげに）うちも悪かったけどさ……碧羽、キレ過ぎやない？ 意味分からんのんやけど。

紫音 ほんと時々あるよね。なんていうか、周りを振り回しても平気な感じ？

七菜（碧羽を庇うように）……周りが見えちゃうんだけどやろ。

紫音（恵梨華に寄り添い、調子良く語り始める）さっきもさ、修学旅行の部屋一緒になろうって急に言いだしたやん。正直、どうリアクションしていいか分からなかったもん。（七菜に向かって勢いよく手を合わせて）ごめんね、七菜。尾野、押し付けたみたいになって。

七菜 ……。（不信感を隠せず、思いを言葉に出来ない）

紫音（七菜の気持ちに気づけないまま）……ああああ、修学旅行、碧羽と一緒に大丈夫かね？

恵梨華（ちよつと意地悪く）尾野の方がマシじゃったりして！

紫音（調子に乗って）それな！

七菜（ひどい！）それは、言い過ぎやない？

暗転。

照明5 暗転

#7 行き違い

溶明。碧羽、コンビニから出てきて、人混みの中、咲良を必死に探す。咲良の笑い声が響き、二〇加煎餅をつけたクロスたち、「ひらひら」と繰り返し唱えながら歩く。ピッチの狂った電車の接近メロディが流れる。酔人が咲良を押しながら、コンビニへと向かっていくが、必死で通りがかりの女性の顔を覗き込んでいる碧羽は気づかない。

音響25 接近メロディ（不協和音）

音響26 接近ベル

照明6 ひらひら

咲良 咲良はティッシュをひらひらします……。咲良はティッシュをひらひらします……。

碧羽（人混みを分けながら）咲良！ 違う。すみません。咲良！ 違う！ 咲良！ 違う！ お姉ちゃん！（電車の接近ベルを聞いて）電車に乗って帰ったんかもしれん。どうしよう！

二〇加煎餅をつけたクロスたちが碧羽の後ろにぐつと近寄る。

碧羽がホームに向かって走り去る。咲良の笑い声が高らかに響き渡る。溶暗。

照明7 暗転

#8 さくら狩り

溶明。女子高生たちが、彫像の周りで、咲良を探しに行った碧羽の噂をしている。

照明8 駅夕2

七菜 碧羽、本気で焦っちゃんやないん？ 一緒に探しちゃげようや。

紫音 でもその子の顔見とらんし。

恵梨華 分からんよね……？ どうやって探すん？

碧羽、駅のホームから戻ってくる。

一同 碧羽！

七菜 探しとる子の画像って持つとらん？

碧羽 なに？ 画像？（かなり迷ってスマホを取り出し、画像を探し始める）いやあ……持つとっ
たかなあ……どうかなあ……？

七菜 一緒に探したいけえさ。

紫音、恵梨華、先ほど、碧羽を悪く言ったことを帳消しにしたくて、大袈裟に頷く。

碧羽 （嬉しくなって）ほんと？（画像を見せながら）この子なんじゃけど。

紫音 え……めっちゃ綺麗。

恵梨華 （碧羽のスマホを取り上げて）かわいい。

紫音 どんな服着ちよった？

碧羽 ピンクのサマーニットに白いパンツ。

紫音 了解。

七菜 名前は？

碧羽 咲良。

恵梨華 （碧羽のスマホの写真をスクロールして紫音に見せ）ねえねえ、誕生日会！

碧羽 やめて！（スマホを取り返す）

恵梨華 ごめん……。

七菜 じゃあ、駐輪場見てくるね。

紫音 うち、ラテバ行ってくる。

恵梨華 うち、外のトイレ！

碧羽 じゃあうち、駅ビル行ってくる。お願い。

一同、咲良を探すためにそれぞれの方向に退場。大、香澄とともに、駅ビルから再び現れる。

大 かすみい、北山からコンビニナートの夜景一緒に見ようよ。マシンで夜のドライブしようって
ば！

香澄 あの子と行けば。

大 あの子っちゃ誰か？

香澄 ほら、モーターズの……。

大 翔にはフラれたの。

香澄 ふうん。

大 じゃあさ、晩飯だけ。ね？ 南口の香^{シヤンシヤン}のチャーシュー麺最高に美味いけえさ。

香澄 ラーメンって気分じゃあ、ないんだよね。

大 じゃあ、どんな気分？

香澄 コンビニのバリバリ麺サラダ食べたい気分。

大 なんか、バリバリっちゃ！ もう、コンビニで買って一緒に食べるう！

香澄 （語気荒く）だから、今日は予定が入ってたの！ ごめんね。
大 よ、予定……？ 誰と会うんか！ 男？ 男だったら嫌だなあ。

駅のホームから帰って来た碧羽、大と香澄を見て、その周囲に翔を探す。大、香澄、コンビニへと退場。

碧羽 なんでもう一人のヤンキーおらんのかな？ もしかしてお姉ちゃんと駐輪場？

碧羽、駐輪場に走って行こうとする。七菜、駐輪場から戻ってくる。

七菜 駐輪場、おらんかった。ライン送ったんやけど、見た？

碧羽 え……？（駐輪場にいないって、どこかに連れて行かれたってこと？）七菜、どうしよう！
連れてかれたんかも、あの変な奴に。

七菜 変な奴？ 痴漢？

碧羽 痴漢？（あのヤンキー以外にも、痴漢って可能性もあったんだ！）お姉ちゃん大丈夫かな？

七菜 お姉ちゃん？（何言ってるの？）

恵梨華、外のトイレから帰ってくる。

恵梨華 外のトイレおらんかったよ。

碧羽 駅ビル！ 駅ビルのトイレ、駅ビルのトイレ見てないよね？

恵梨華 え……見てないん？ ちよつと待ってよ！

七菜 ちよつと碧羽、待ってよ、早いつて！

碧羽、駅ビルに向かって猛スピードで走り出す。二人も後を追うが、追い切れずに立ち止まる。

恵梨華 （七菜に）……なんか、碧羽、すごい勢いで怖いくらいじゃね。

七菜 お姉ちゃんって言いよった。

恵梨華 誰が？

七菜 今探しよるの。

恵梨華 ん？

七菜 碧羽のお姉ちゃんって……。

恵梨華 知り合いつて言いよったやん。（さっき見た碧羽のスマホにあった誕生日ケーキを前にした家族写真を思い出し呟くように）……誕生日会の写真？

七菜 え？

恵梨華 （自分の考えを振り払うように）イツメンに隠し事はせんやろ。

七菜 ……よね？

紫音、ラテバから興奮して戻ってくる。

紫音 （鬼気迫る言い方で）ねえ、聞いて聞いて聞いて！ マジやばいけえ！

恵梨華 （待てずに）なにが？

七菜 どうしたん？

紫音 （突然、でれつとイケメンの真似を始めて）イケメンにい、「君より綺麗な人？」って聞かれたから、「もちろん！」って言ったらさ、「そりゃ、ものすごい美人なんだな。っん（指でおでこをつつく）。」って……。もう、めっちゃかっこよかったけえ！

七菜 なん盛つとるん！

紫音 盛つとらんもん。本当に「君より綺麗な人？」って聞かれたもん。

恵梨華 はいはい。後は、妄想ね……。

紫音 違うっちゃ、っんって、っんって……。

七菜 それ、碧羽に言わんことよ。

紫音 なんで？ 嫉妬されるかね。

七菜 いやいやいや、怒られるけえ。ちゃんと探したん？

紫音 （ムキになって）顔覗きこんで探したもん。店内も隅々まで。（再びうつとりして）その後励ましてもらったけどね。

恵梨華 ラテバのトイレは探した？

紫音 探してない。もっかい（もう一回）行く？

七菜 （紫音の腕をつかみ止めて）真面目に探さんと怒られるよ。

紫音 （さらにムキになって）さっきも真面目に探しました。

七菜、紫音、恵梨華、ラテバのトイレに探しに行こうとする。ちょうどその時、碧羽が駅ビルから帰って来る。

恵梨華 あ、碧羽。ラテバのトイレ行った？

碧羽 行った。駅ビルも男子トイレも全部探した。でもおらんかった。（周囲を見回しながら）もうどうしたらいいん。

恵梨華 （焦って）ちよつと待って。男子トイレも探さんといけんかったん？（言い訳のように）うち、男子トイレ無理よ。絶対無理！

碧羽 （すぐに外のトイレに向かって走り出しながら）もういい、うちが行くけえ！

碧羽、外の男子トイレに向かって退場。七菜、紫音、恵梨華、碧羽を追いかけて階段を下りる。

恵梨華 ごめん、碧羽！

紫音 （突然立ち止まって）あ、思い出した。ラテバにさ、サクラさんの名前呼んどる人おったよ。

七菜 はあ？ なんでそれ先に言わなかったん！

恵梨華 どんな人？

紫音 えっと、赤いTシャツに……青いズボンの人！

七菜 知り合いかね？

恵梨華 やばい奴やないん？

紫音 その人に連れてかれて、逃げよるところとか？

恵梨華 どうするんよ、なんて言ったらいいん。

碧羽、顔面蒼白で潰れかけた箱ティッシュを抱えて戻ってくる。咲良の持っていた箱ティッシュと同じものである。

七菜 （碧羽を見つけ）碧羽？ なんでティッシュ持つとん？

碧羽 男子トイレに落ちちよった……。

恵梨華 （驚愕して）なんで落ちちよるティッシュ捨ってくるん……。

七菜 （深刻に）碧羽、聞いて！ 紫音がさ……。

紫音 ごめん。さっきすぐに言えば良かったんやけど。

七菜 サクラさんの名前呼びよる人がおったんて。

紫音 赤いTシャツに、汚れた青い作業着の人！

恵梨華 ラテバでサクラって叫びよったんて。

七菜 知り合い？

碧羽 ……さっき絡まれよった。

恵梨華 やっぱそうやん！ 連れて行かれて逃げよんやない？

紫音 どっかに隠れちよったら……。

恵梨華 なかなか見つからんよね。

七菜 そうなったらうちらあでどうこうできる問題じゃないけえさ。

恵梨華 警察行つたほうがええよね？

友人たちがこれからどうすべきかを真剣に話し合っているなか、碧羽は茫然としている。上手袖から咲良の声が微かに響いてくる。

#9 真相解明

咲良、新しい箱ティッシュを手に上手から登場。何かを呟きながら、駅のホームに向かおうとしている。

咲良 咲良は四時二十分の電車に乗ります……。

碧羽、咲良を見つけて、持っていたティッシュを落とし駆け寄り、力強く抱きしめる。

碧羽 お姉ちゃん、お姉ちゃん！ 良かったあ。おっつけて。

紫音 お姉ちゃん？（今碧羽、お姉ちゃんって言ったよね？ と言いた気に周囲を見る）

友人たち、碧羽の「お姉ちゃん」の言葉に怪訝な顔をして見つめ合う。咲良、抱きしめられたため

肩に痛みが走りのけぞる。パニックになって唸り始め、碧羽を突き飛ばし、たまたま碧羽の友人たちのいる方に走り出す。友人たち、突っ走ってくる咲良に驚いて逃げる。一同、桜の木の下に避難しようとしたが、七菜、紫音は毛虫がいることを思い出し、悲鳴をあげて階段上に逃げる。恵梨華、木の下にとどまる。さらに碧羽に追われた咲良は、階段上に逃げ、七菜と紫音の側に寄るため、二人は悲鳴を上げて奥に逃げる。

碧羽 ちよつと待つてよ、お姉ちゃん！

咲良 （パニックになって）痛い痛い痛い。いたああい……。

碧羽 お姉ちゃん！（冷静さを失い、咲良の肩を掴んでいることに気づかないまま）どうしたん？どこが痛いん？（碧羽から逃れようとする咲良にティッシュ箱で叩かれ）痛い痛い！ ねえ、なんで？ なんでそんなパニックになっちゃん？ どこ行っちゃったん？ 誰に連れて行かれちゃったんかっちゃ！ 言ってくれんと分からんじゃん！ ヤンキー？ あの赤と青の服着ちゃった人？ さつき絡まれよったじゃん！（ポスターを見直し）痴漢？ 黒いスーツ着ちゃった人？ なんかされたん？（咲良に詰め寄り肩を掴む）

咲良 あ、あ、あ、あ、あ……。

碧羽 （咲良に再び箱ティッシュで激しく叩かれ）痛いっちゃ！（咲良の箱ティッシュを取り上げて）なんで新しいティッシュになっちゃん？

咲良 （ティッシュが無くなってパニックになり、ティッシュを追いかけながら）ない！ ない！ …。あ、あ、あ、ああああああ。ああああああああああ！

碧羽 こんな高いティッシュ普段買わんやん！ 誰に買ってもらったんかっちゃ、こんな高いティッシュ！ 言ってくれんと分からんじゃん！（地面に箱ティッシュを叩きつける）

咲良、投げ出された箱ティッシュを慌てて取る。パニックがさらに激しくなっている。

碧羽 引っつもこう。引っつも振り回される。バカみたいじゃん、うち……。

香澄、大とコンビニから帰ってきて咲良の様子に驚き、咲良の背中を撫でてなだめる。

大 （パニックになっている咲良を見て）おうおうおうおう、大丈夫かサクラ？

香澄 大丈夫、大丈夫……。

碧羽 （大と香澄に）お姉ちゃんに何したんですか？

大 何だとお？

香澄 背中さすってるだけ。アオバがやってたみたいに。

碧羽 いや、そうじゃなくて、今までどこにいたんですか？ あの人は、あの人はどこにいるんですか？

大 あのやつちや誰かあ？

碧羽 赤と青の、あの……小さい方の人ですよ。

大 小さい？

香澄 ああ、翔？ はははは、大と小！ コンビ名、最高！

大 （嬉しそうに）おう！ 翔は別に小っちゃかねえけどな。職場に戻ったぞ。
碧羽 嘘！ さっきラテバにいたって友達が。
大 そんないい加減なこと言う奴は誰かあ？

紫音、ぎよつとして、七菜の背後に隠れる。七菜、紫音から離れようとする。恵梨華、紫音を見る。

紫音 いや、その人かどうかわかりません！

碧羽 でもおったんやる？ 赤と青の服着ちよった人。

紫音 恰好だけで決めつけられてもね……。

大 そりゃそうじゃのう。

紫音、ほっと胸を撫で下ろす。

碧羽 （大に）じゃあ、お姉ちゃんは誰に連れて行かれてたんですか？

大 知るかあや。

香澄 もしかして、私たち疑われてる？

大 （碧羽に凄んで）おらあ。

香澄 （咲良に）私たち仲良しだもんね。

大 （香澄が自分と香澄のことを言ったと勘違いし、急にデレデレと）もうかすみい、照れるう。

碧羽 （呆れたように）……仲良しって。

香澄 （大の誤解を解くように）咲良とね！

碧羽 さつき絡んできただけじゃないですか。

香澄 ひつどろ。もつと前から秘密の仲良しだもんね。（咲良に手をつき出して）よつ。

咲良 （香澄の手に自分の手を重ねて）よつ。

碧羽 秘密って……。

香澄 咲良、言ってやんな、アオバに。私も自由に歩き回りたいって。

咲良 歩き回りたいあ。

碧羽 （むつとして、これ以上会話を続けたくなくて）その高級なティッシュ、買っていたいて

大 ありがとうございました。

香澄 高級なティッシュ？

大 いや、私たちじゃない。

大 おお、これか。眼鏡のおっさんに買ってもらってたぜ。サクラもやるなあ。

咲良 もやるなあ。

碧羽 ……痴漢？

大 痴漢？

香澄 （笑いながら）その看板？

碧羽 おかしいですか？

大 （階段を下りて看板を確認し）おおおおお、黒いスーツ着ちよったのう。

香澄 大、止めちよきい。

澄がいた方向を振り返ると、香澄がいないので、香澄を探しながら）香澄？ かすみい〜！
（駅の方に退場）

咲良 どこどこどこ。どこかつちやかす。かすみい。

#10 ……なんでそんなこと言うん？

碧羽、咲良を椅子に座らせようとする。七菜、紫音、階段を下り碧羽に近づく。恵梨華、木の下から出てくる。

碧羽 もう見つかったけえ、帰って。……心配させてごめんね。もう大丈夫です。咲良は椅子に座ります。

咲良 碧羽だあ。

碧羽 お姉ちゃんだあ。咲良は椅子に座ります。咲良はティッシュをひらひらします。

咲良 咲良は椅子に座ります。咲良はティッシュをひらひらします。

恵梨華 ……大変やね。

碧羽 大変？ ……なにが？

紫音 なにがって、サクラさん……。

碧羽 うちねえ、大変ねえって言葉が一番嫌いなんよ。上から目線でかわいそうとか思っちゃんやろ。

咲良 大変ねえ。

恵梨華 いや……そんなこと……。

七菜 お姉ちゃんやったんや。

碧羽 最低やろ、うち。みんなに嘘ついちゃったんちゃ。この人のこと、恥だと思っちゃんよ。

咲良 最低……。

碧羽 うち、イツメンの資格ないけえ。

咲良 （空中に四角を描き）しかくないけえ。

紫音 なんだ？

碧羽 うちが尾野と同じ部屋になります。はい終わり、まる。

咲良 （空中に丸を描き）まる。しかくないけえ、まる。

七菜 今、尾野関係ないやろ。

碧羽 うちも尾野と同じぐらい面倒臭い奴なんよ。

七菜 じゃけえ、関係ないっちゃ！

碧羽 こんな風に振る舞ったら、みんなと同じように見えるんかなって、楽しそうに見えるんかなって。気を遣っちゃんよ、みんなとおると。

咲良 かなって……。

七菜 それは隠そうとするけえやろ。

碧羽 はあええけえ、帰って！ ありがとうございます。

咲良 帰って……。

七菜 ……は？ それ、おかしいんじゃないん？ なんてそんな風に言われんといけんのん？ うちら、必死で探しちよったのに。嘘ついちよったのは碧羽やろ。

清掃員、吐瀉物を掃除しに現れる。

碧羽 嘘ついてすみませんでした。

咲良 嘘……。

恵梨華 嘘ついちよった訳じゃないよね。言えんかったんよね。

碧羽 なんも分からんのに、知ったようなこと言わんで。

七菜 言ってくれんと分からんじゃん。……イツメンやけえ知りたいうって思うんじゃないん？

紫音 碧羽、うちらあ……聴くよ。

碧羽 教えちゃげようか？ うちねえ、お姉ちゃんの面倒見るために産まれたんよ。親が死んだ後、お姉ちゃんが一人にならんように。じゃけえ、うちが楽しんじやいけんかったんよ。

咲良 いけんかったんよ……。

一同、言葉を失う。清掃員、掃除を終え、碧羽の話聞きながら去る。

恵梨華 ……そんなん、悲しすぎるやん。碧羽には碧羽の人生があるんじゃないん？ プリクラ撮ったり、ラテバ行ったりしてもええんじゃないん？

碧羽 じゃけえ隠しちよったんよ。みんなとおるときだけでも、普通でおりたかったんよ。

咲良 ふっう……。

恵梨華 分かるよ、その気持ち。

碧羽 （ものすごい勢いで）は？ 分かる訳ないやん。みんな、尾野だって耐えられんやろ？ お姉ちゃん、尾野の何十倍も面倒臭いんやけえ。

恵梨華 でも、障がいなんじゃろ？ 仕方ないじゃん。

碧羽 それが綺麗事なんよ。うち、見ちよったんよ。

咲良 見ちよった……。

碧羽 みんなが、パニックになっちよるお姉ちゃんから必死で逃げよったのを。……別に、責めとるわけやないけえ。それが現実やけえさ。

咲良 現実……。

七菜 驚いただけじゃん。……でもさ、碧羽がさ、いや、うちらあもやけど、尾野にやっとなる態度ってどうなん？ 障がい者やなかつたら避けてもええってことなん。それこそ綺麗事やろ。

碧羽 一緒にせんでよ。

七菜 一番差別しとるの、碧羽やないん？

碧羽 ……それが綺麗事なんよ。お姉ちゃんは特別扱いせんと生きていけんのんやけえ！

紫音 （碧羽と七菜の間に立ち、七菜を止めて、碧羽に）……もう、イツメンなれんの？ 障がいのあるお姉ちゃんおつたら友達なれんの？

恵梨華 ……碧羽、うちらあどうしたらええ？ どうしたら碧羽の友達、（碧羽に近づき肩に手を掛け

ようとするがためらう）友達でいさせてくれるん？

咲良 友達……。

碧羽 そんなん分からんよ。……分らんけえさ、はあ帰って！ ありがとうございました。

咲良 帰って……。

一同 ……。

七菜、大きなため息をつき、駅ビルに向かって退場。紫音、恵梨華、七菜が去っていったことに驚く。紫音はすぐに歩き出せず、恵梨華を見る。が、少しして七菜の後を追う。恵梨華もかなり逡巡したが、咲良の「帰って」の言葉に押されるように歩き出す。途中、立ち止まって、碧羽に何か言おうとするが何も言えず、そのまま退場。碧羽、恵梨華たちが去った後を一瞬追おうとするが、すぐに立ち止まり、下手ベンチに鞆を投げ出し、咲良の前にしゃがみこむ。

碧羽 （散らかったティッシュを咲良にぶつけながら）最悪。

咲良 最悪……。

碧羽 みんなにバレたやん。明日からどうやって学校に行けばいいん。どうやってみんなと話せばええんよ。なんで？ なんでうちがお姉ちゃん的面倒見んにやいけんのん！ なんで……。
咲良 なんで……。

碧羽、咲良にティッシュをぶつけ続けながら、泣き出す。咲良、ぶつけられて遊んでもらっているかのように喜び、声を上げて笑う。碧羽、泣き崩れる。

咲良 （碧羽の傍にしゃがみ、背中を撫でながら）大丈夫、大丈夫。

碧羽 （咲良の手を振り払って）大丈夫じゃないっちゃ。（咲良から離れてしゃがむ）

咲良 （追いかけて、再び背中を撫で）友達。

碧羽 （さらに振り払って）あんたの友達やないし。

咲良 （背中を撫で）大丈夫、大丈夫。

碧羽 （強く振り払って）大丈夫やないって言いよるやん！

咲良 友達。

碧羽 友達やないって言いよるやん！

咲良 すきい！

碧羽 ヤンキーの真似なんかせんでいいし。（立ち上がってベンチに座り直し、咲良に背を向ける）
咲良 （翔にやられたようにベンチの後ろに周り、碧羽の肩に手を置いて）まじまじまじ。すきすきすきい。まじまじまじ。すきすきい。

碧羽 ……。

咲良 碧羽だあ。……碧羽だあ。（宙に文字を書きながら）碧羽、王様の白い石に羽が生えます。（羽ばたく動作をしながら）碧羽……。

碧羽 （咲良が碧羽の名前の漢字について呟いていることに気づき、失笑）ええよねえ、お姉ちゃん……。

咲良、碧羽の涙に気づいたためか、あるいは、よく見る彫像を真似たのか、碧羽の目を両手で覆う。

咲良 碧羽だあ。（碧羽の目を両手で覆う）

碧羽 （咲良に突然目隠しをされ怒ったように）もう、なんするん！（突然大声でやけっぱちになつて）咲良はいいなあ、暢気で。うちも咲良になりたい。

咲良 ……碧羽、になりたい。碧羽になりたい。碧羽になりたい……。

碧羽、咲良の言っていることの意味が分かった瞬間、咲良を振り返る。

碧羽 （叱りつけるように）あんた、なんも意味分かつちやらんやろ！ ずるい！ なんで今そんなこと言うん？ ずるい。なんで。あんたなんも意味わかちやらんくせに……。

音響30 桜色舞うころ

③

咲良 碧羽、になりたい……。

碧羽 （咲良にすがって泣き崩れたまま）もう、なんなん……。

咲良 碧羽。碧羽になりたい……。

駅ビルの方から清掃員登場。下手ベンチの周囲に散らかったティッシュを掃除し始める。

碧羽 （清掃員に気づき、慌てて涙を拭いて、ティッシュを拾い集め始める）あ、すいません。今片付けます。

香澄 いつも綺麗にご利用いただき、ありがとうございます。

碧羽 香澄さん、香澄さんだあ。

香澄 うん！（咲良に手を出し）よっ。

咲良 （香澄の手に触れ）よっ。

碧羽 （清掃員が香澄だと気づいて）あああ！

香澄 （微笑んで）じゃあ、後は二人で。

香澄 （去りながら、彫像の上に碧羽が置いた二〇加煎餅を取り、仮面の絵が描かれた箱を目元に当てて）秘密も、悪くないよね。

香澄、軽やかに駅の方へ退場。

碧羽 （呆然としながらも）咲良はティッシュを拾います。

咲良 咲良はティッシュを拾います。

碧羽 （香澄が去った方を見て）……なにが「よっ」だよ。

碧羽、呆然とティッシュを拾おうとする。

咲良 （碧羽に手をつき出し）よっ。
 碧羽 （驚き、少しためらった後、咲良の手に自分の手を合わせて）よっ。
 咲良 （嬉しいのか、再び勢いよく手を出し）よっ。
 碧羽 （咲良の思いを受け取るかのように、今度はしっかりと手を重ねて）よっ。
 咲良 （さらに手を出し）よっ。
 碧羽 （はにかんで）もういいいけえ、拾って。
 咲良 拾って。

#11 信じて……

碧羽、咲良とティッシュを拾う。翔、とぼとぼと駅ビルから登場。咲良を見つけ駆け寄る。

翔 サクラさん？ よかった、また会えた。やっぱ運命だ。
 咲良 運命だ。

碧羽 ずっと探してたくせに。
 咲良 くせに。

翔 サクラさん、あの……これ、ネックレスです。サクラさんのために職場で作ってきました。
 咲良 （ネックレスを掴んで）キラキラ……。

碧羽 あの、ネックレスは無理なんで。
 翔 ああ？

姉は首から肩にかけて感覚過敏があるから。

碧羽 （感覚過敏がわからず）か、か、かんか……。

痛い！ だから、姉は普通じゃないって言いましたよね。

翔 （がっくりと肩を落とす）いつもこう……。なにやってももうまくいかんし……。

貸して。（咲良からネックレスを取り上げる）

咲良 ない……。

碧羽、ネックレスを二重にして、咲良の手首にかける。

咲良 （かけてもらったネックレスを触り）キラキラ。
 翔 （元気を取り戻して）ありがと、葉っぱ。

……碧羽です。

碧羽 ありがと、アオバ。

ありがと、碧羽。

咲良 ありがと、アオバ。

碧羽 （翔の言葉を真似ただけのはずの咲良の言葉が意味を伴って心に届いた気がして）え……？

翔 俺そろそろ職場に戻らないと。（咲良の手を取り、祈るように）サクラさん、また。

咲良 また。

運命を信じて。

咲良 信じて。

碧羽 ええっ？

碧羽、再び、咲良が自分の思いから言葉を発したように感じて、咲良から目が離せない。

翔 （嬉しくなって）うん……。じゃあ、また。

咲良 また。

翔 アオバもまたな。

碧羽 （二人をじっと見つめたまま）……。ありがとう。

咲良 ありがとう。

翔 うん！（飛び跳ねて）やったあ！

咲良 やったあ。

翔、駐輪場側に退場。碧羽、咲良が本当は何もかも分かっているのではないかと思えて、じつと見つめる。咲良は、ブレスレットになったネックレスの光を楽しんでいる。その間に七菜、紫音、恵梨華が、駅ビルから戻ってくるが、碧羽は気づかない。

七菜 （毅然と）碧羽、話があるんやけど。

碧羽 （七菜の声に気づいた途端、意を決したように立ち上がって、友人たちに近づく）さっきはひどいこと言ってごめん。うち、周りがみんな敵に見えて、自分だけが大変な気がして。お姉ちゃんの気持ちも、尾野の気持ちも、みんなの気持ちも忘れちゃった。

七菜、紫音、恵梨華、碧羽の予想外の反応に顔を見合わせる。

七菜 （語気荒く）なんで？

紫音 七菜！（もう傷つけることは言わないで！）

一同に緊張が走る。

七菜 （突然、優しく碧羽の肩に手を回し）なんでうちらあが敵？（隠していたラテバのジュースを差し出しながら）うちら、イツメンやろ？

碧羽 ……え？

紫音 飲みたかったんやろ？ ベリーベリーベリーマッチ。

恵梨華 （咲良のもとに駆け寄り）お姉ちゃんにも、いい？ はい、（カップを持たせながら）キャラメルムーチョ。

咲良 ムーチョ。ムーチョムーチョ。

七菜 （碧羽にカップを持たせながら）はい、はいはい、飲んで。
紫音 飲んで飲んで。

碧羽、友人たちの顔を見回しながら、ジュースを飲み込む。

紫音 どう？ 美味しい？

恵梨華 どうだろう？

碧羽 ……うん、美味しい。

紫音 イツメン最高って……。

碧羽 思った！

紫音 書いてもらったんよ。（カップに書かれた文字を示しながら）イケメンに。

七菜、紫音、恵梨華に「言っちゃダメ！」と合図をするが、手遅れ。紫音、二人の表情を見て、後からまずかったと気づき青くなる。

碧羽 （カップに書かれた文字を見つめながら）これって、自分の為やろ。

七菜 （明るく、笑いにしようと）ちゃっかりね。

恵梨華 （場を和ませようと更におどけて）抜け駆け！

紫音 （おどけるしなくなつて）「つん」してもらった仲やし。

恵梨華 ひどい。ひどい。ひどいよ、それ。ずるい！

咲良 ひどーい……。

碧羽 ……ひどいよね……。

紫音 （自分に言われたと思い）ごめんって。

碧羽 うち。……うち、尾野にひどい事しちよつた。

紫音 ……うちも同じやけえ。

恵梨華 うちもノリで騒いじよつた。

七菜 （明るく）尾野、一緒でも面白いかもしれんよ。（尾野を真似て）「どうするどうする〜？」

七菜の尾野の真似に紫音、恵梨華も加わる。

七・紫・恵 「どうするどうする〜？ どうするどうする〜？」

紫音 （真剣に、碧羽に、向き直つて）碧羽、どうする？

碧羽 ……うちだつて平気やし。

恵梨華 ほんとに？

一同、碧羽の反応を見守る。

碧羽 ……たぶん。

恵梨華 たぶんかあい。

咲良 たぶんかあい。

恵梨華の突っ込みに一瞬静まりかえるが、咲良の繰り返しをきっかけに、一同、笑い出す。

碧羽　でも、みんながおったら……。
七菜　（肩を抱き）イツメンやけえね！

車のクラクションが響く。

音響31 クラクション

母　（声のみが響いてくる）碧羽、咲良。はよ乗ってえ、お祖母ちゃんが病院で待ちよるけえ。

碧羽　どれだけ待たせたと思っちゃよん！　何回も電話したんよ！

母　ごめん！　携帯、病院に忘れて来たんちゃ。渋滞しとったんよ！

碧羽　なんしよんよ。

母　とにかく、はよして！

碧羽　勝手すぎ！（慌ててティッシュを片付け始める）

母　……ありがとう、碧羽。

碧羽　……。母の言葉に呆然と立ち上がり、頬をほころばせる）

音響32 桜色舞うころ④

七菜　片付けちよくよ。

碧羽　ありがとう。

恵梨華　お祖母ちゃんどこ、はよ行かんとね。

碧羽　うん！

紫音　（碧羽の鞆を渡しながら）イツメンに任せて！

碧羽　ありがとう。

咲良　……イツメン。

碧羽　（答めるように）お姉ちゃん……。

碧羽、咲良がイツメンと言ったことで、気まずく感じて、慌てて友人の顔を見る。

七菜、碧羽の傍にしゃがみこみ、笑顔で咲良を見つめる。

七菜　（満面の笑顔で咲良に）うん、イツメン。

恵梨華　イツメン？

一同　最高！

碧羽、ほっとし、満面の笑顔で友人たちを見つめる。

咲良　イツメン。最高。

碧羽　（咲良にティッシュを持たせながら）はい、咲良は立ちます。

咲良　碧羽だあ。

碧羽　お姉ちゃんだあ。咲良は立ちます。

咲良　咲良は立ちます。

碧羽、咲良、立ち上がる。

七・紫・恵 バイバイ。

咲良 バイバイ。

碧羽 バイバイ。

照明9 ラストSS

照明10 ラストTOP

舞台2 緞帳DOWN

碧羽、咲良を一瞥し、自分たちを囲む友人たちに笑顔で手を振る。七菜、紫音、恵梨華も手を振りながら、満面の笑みを返す。

駅ビルに向かう階段上に、香澄、再び掃除をしながら登場。大、香澄を探して駅のホームから駅ビルに向かっていている。駅ビルを出たところで、香澄と目が合い、香澄と気づき驚く。夕暮れ時を迎え、桜庭駅周辺は人々が慌ただしく行き交い始める。大きな桜の木は、初夏の夕風に若葉を揺らしている。

幕

〈参考文献〉

太宰 治『葉桜と魔笛』青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

岸田 國士『葉桜（一幕）』青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

横山拓也2018「あたしら葉桜」『iaku 演劇作品集 戯曲集I』iaku

東田直樹2018『ありがたうは僕の耳にこたえます』KADOKAWA

東田直樹・山登 敬之2016『社会の中で居場所をつくるー自閉症の僕が生きていく風景(対話編・往復書簡)』ビッグイシュー日本

東田直樹2016『自閉症の僕が跳びはねる理由』角川学芸出版

東田直樹2016『自閉症の僕が跳びはねる理由(2)』角川学芸出版

東田直樹2014『跳びはねる思考 会話のできない自閉症の僕が考えていること』イースト・プレス

東田直樹2013『あるがままに自閉症ですー東田直樹の見つめる世界ー』エスコアール

東田直樹・東田 美紀2005『この地球(ほし)にすんでいる僕の仲間たちへー12歳の僕が知っている自閉の世界ー』エスコアール

司馬 理英子2018『わたし、ADHDガール。恋と仕事で困っています。』東洋館出版社

吉濱 ツトム2018『発達障害の人のための上手に「人付き合い」ができるようになる本』実務教育出版

ドナウイリアムズ (著), 河野 万里子 (翻訳)2000『自閉症だったわたしへ』新潮社

ドナウイリアムズ (著), 河野 万里子 (翻訳)2001『自閉症だったわたしへ(2)』新潮社

ドナウイリアムズ (著), 河野 万里子 (翻訳)2004『自閉症だったわたしへ(3)』新潮社

戸部けいこ2001～2010『光とまゆに1～15巻』秋田書店

